

日 本 学

吉田 吉之助

扶桑に一士あり、志を立てて先賢を慕う、独り帝王の学を修め、聖賢の前に述べず、空しく経綸の策を抱き、四海の辺に施さず、胸に書万巻を羅ね、囊に山を買うの錢なし、頽齡七十八、孤榻膝を擁して眠る、寵辱は吾れ与らず、窮通は唯だ天に任す、豈会心の友莫からんや、仰いで望む芙蓉の巔。

扶桑一士志慕先賢獨修帝王學
不陳聖君前空抱經綸策而施四海
胸羅書万巻囊羅山錢歎齡七十八
孤榻擁膝眠寐辱吾與窮通唯任天
豈莫會心友作其芙蓉巔

吉田吉之助

吉田吉之助

これは昭和十五年、蘇峰先生七十八歳の作であること、詩中にも詠われている。この詩によって、先生は自ら「土」を以て任ぜられ、若い頃から先賢の思索に心をよせ、「帝王学」の修得にはげんでおられたことを汲みとることができらる。

さて、その前々年、昭和十三年に、次の七言絶句をものされて、宮田武義氏に与えておられる。

滿腹の経綸民を濟わず、等身の著作猶お貧を憂う、長笈短布白頭（きんぎょう）の客、好箇芙蓉峰下の人。宮田雅宗之を正せ、蘇峰七十六叟。

蘇峰先生の喜の字をはさんだこの兩三年の間、日支事変は拡大の一途を示していた。そして、日本の津々浦々はお

ろか、大陸の戦野にも、徐州会戦の戦捷に乗って次の「麦と兵隊」の唄が流行していた。

へ徐州徐州と人馬は進む、徐州居よいか住みよいか、洒落た文句に振り返りや、お国訛りのおけき節、聾がほは笑む麦畑。

へ友を背にして道なき道を、行けば戦野は夜の雨、すまぬすまぬを背中に聞けば、馬鹿を言うなとまた進む、兵の歩みのたのもしき。

かくして、日本軍の軍靴は、北は内外蒙より南は江南を蹂躪し、支那四百余州へ戦線は拡大して行った。その進軍は、まことに旭日昇天であったが、兵隊の軍靴のひびきには一種の哀愁があった。

滿腹経綸の民等身著作猶憂貧
長笈短布白頭客好箇芙蓉峰下人
宮田雅宗之 蘇峰七十六叟

元来、「大陸進出論」は蘇峰先生の強く主張されたところのものである。「満洲事変に際しては、勇躍之に趨いたのは、翁（大毎、東日の本山松陰翁）と予であった。皇國の大陸進出、興亜経綸の実行、皆予と翁との本望とする所」、という文章が、先生の著「昭和国民読本の跋文」に見え、読本は一貫して大陸と日本の交流を歴史的に叙述して、興亜経綸の主張に力を入れておられる。また当時、いたるところの講演会で、先生の、声を大にした大陸進出の唱道が聴けたことであろう。

思うに、漢大陸と大和島根との交流は、有史以来数千年の長きに亘って行われたことは通説である。これを史実に徴すると、九州の志賀島から、江戸天明年間に「漢倭奴国王」の金印が発見された事実がある。この金印は後漢の光武帝の中元二年（五七）の印綬と推定されている。この委奴国があったとされる北九州地方の古墳からは、漢鏡など、多くの大陸文物の出土を見ていることは周知である。以来二千年、さまざまな交流が行われ来た末に、今回の日中国交正常化となった。こういう経緯を見ると、この交流の中には大陸人の考えた日本列島進出論もあれば、日本人の考えた大陸進出論もある。具体的には元寇や八幡船、蓬萊に仙菓を求めしめた秦の始皇もあれば、隋王朝に仏教を求めしめた聖徳太子もいる。だから、大陸進出論は蘇峰先生の専売特許でもなく、登録商標でもない。それは、歴史

を通じての日支両民族の宿命的な願望なのである。

清末、阿片戦争（一八四〇〜一八四二）以来、西欧勢力の浸透により、混乱に混乱を重ねていた中国に、日本はどんな手を打ったか。日本の危急存亡に深いかかわりを持つ焦眉の事態が、陸統として中国に生起していた。一衣帯水の日本としては、その是非は別として、それに対処する手は必らず打って来た。日清役（一八九四〜一八九五）も日露役（一九〇四〜一九〇五）もそうであったし、満洲事変（一九三一〜）も支那事変（一九三七〜）もそうであった。終戦（一九四五）以来、中国大陸と没交状態がつづき、大陸についての関心が薄れていたが、今日また交流が再開されるに至って、今後、さまざまな大陸との交流論が出てくることであろう。今日、このへんで、日支事変のさなかに、蘇峰先生が唱えられた、日本学を基調とした大陸経綸を再考することは、重要な意義があることと思う。

昭和国民読本の中で、「我等は暴を以て暴に代ゆるを欲しない。我等は毒を以て毒を制するを屑よしとしない」といつている。この先生の言葉は、終戦時の蔣介石総統の言葉と偶然に符合するのであるが、これは奇しき因縁というよりも、むしろ、東洋民族の数千年に亘る熟慮の接点として、受けとめるべきものであろう。戦が進むにしたがって、もともとの「以和為貴」という日本学の基調が次第にくずればじめて、大陸の戦相が、先生の意図するとこ

ると相違する様相を呈して来た。これについては、國民読本の中で、次のように警告されている。「我等は大陸経営には、日支の協戮を必須とする。既に必須とすれば、互ひに諒解し、互ひに其の長短を補はねばならぬ。而してそれは現時の興亜運動において、自から指導者を以て任ずる日本人が、自から支那及び支那人を諒解し、併せて支那人をして、日本及び日本人を諒解せしむる所以の道を尽さねばならぬ。これは決して性急短慮の仕事では無い。叱咤怒号の仕事では無い。鞭と拍車との仕事では無い。人類相愛、隣保相親の大道に頼らねばならぬ。自己の力を持つて他の民族を抑圧し、自己の口腹を饜さんが為めに、他の血肉を饜食するが如きは、是れ西洋覇者の所為のみ。今更ら咎めて其の咎に倣ふが如きは、是れ日本自滅の門に入らんとするもの。我等は深く自ら省み、自ら警めねばならぬ」と。こういう考え方は、蘇峰先生の興亜思想に一貫している骨格である。

そういう考え方は、中国にも抬頭し、汪兆銘氏一派は歐米一週到の重慶國民政府と袖を分ち、南京に親日政府を樹立した。現在、日本へ亡命中の胡蘭成氏はその要人の一人である。

しかし、そんな物の考え方は、日本においても中国にあつても、主力を占めるに至らず、徳富蘇峰も汪兆銘も鬱々として、日陰の草として放置されているうちに、日本の

如何に心は逸るも、時の力に抵抗は不可能だ。されば如何に長生を祈るも、とても我が日本の皇道世界化の日を見ることは出来まい。然もその日の来る可きを確認して、敢て之を、次期の日本を担当する我が青年処女に囑望する。希くは健全なる日本人たれ。質実なる日本人たれ。勇敢なる日本人たれ。光明開朗なる日本人たれ。堅忍不拔なる日本人たれ。而して如何なる場合たりとも、君国の為めには、欣然として一身を献ぐる日本人たれ。そして、國民読本は、先生の遺言めいたそんな言葉につづいて、藤田東湖の「万古仰天皇」の一句を掲げ、「昭和十三年十二月十一日大森山王草堂に於て。時に凍雲漫々、窓を圧して来る」と、結語されている。そして巻末に「静かに紅日の扶桑に出づるを觀る」の句を残して終っている。

今は棄て去られて、一顧の価値も認められない「昭和國民読本」は、実は「万巻の書」の集約であり、「蘇峰学」の完結であり、「日本学」の真髓であると思う。その日本学に基づ盤をもった経綸が、当時の軍事、内政、外交に噛み合わなかつたことは敍上の如くだが、これを現在のご時世に披露するならば、おそらく、一顧の価値もなき陳腐なものとして唾棄されることであろう。それは、なぜであろうか。一言にしてこれをいえば、学問のスケールの違いである、といえるであろう。もつと適切な言葉を用うるならば、それは万巻の書と一片の紙の相違であり、更にいうな

軍部と、これに迎合するマスコミは、日独伊三国同盟に基く独伊依存型の戦略方式に偏重し、これを以て輿論を形成して行つた。

このことについては、「他国依存の醜態を学ぶ勿れ」として、國民読本に次のような警告を発しておられる。曰く「然も如何なる場合たりとて、日本は自力で立つことを覺悟せねばならぬ。同盟も条約も協定もその上の事だ。我等は如何なる場合たりとも、他国依存の醜態を学ぶ可きものではない」と。

このような「中正以て天下を觀る」主張は一般から斥けられ、日本に長く伝わる興亜運動や八紘一宇の思想の内容が空虚にされたまま、戦況は次第に西洋覇者流の軍国主義的侵略の様相を呈するようになった。

事心と違ひ、そんな時、東洋の一連の哲人は、同じような立ち場をとり、達觀の境地を拓くことに努める。楚の屈原は「離騷」を歌い、東晋の陶淵明は「歸去來の辭」を詠い、宋の蘇東坡は「赤壁の賦」に風懷を托した。わが徳富蘇峰もその例に洩れなかつた。前掲の二首を含めた晩年の詩賦は、「晩晴の賦」とも称すべきもので、これは後世に永く遺り、人々に感動を与え続けるものであろう。

三百余頁の小著・昭和國民読本は、先生のまとまつた著として最後のものに属するであろうが、文の終末の部分に、次の記述がある。「本文の著者の如きは老人である。

らば、思索における時空の差の隔たり、と云うことができよう。

ここで再び、昭和國民読本に戻ることにするが、その「日本学」の項において、蘇峰先生は、「日本学は学問としては存在しなかつたが、それは歴史として存在した」と規定され、「皇室中心主義は、日本学の基調である」と喝破され、その故に、日本学は帝王学である、とされる。この「皇室中心主義」は、方便から出来した單純な形而下の「主義」として捉えてはならない。皇室中心主義は、時空を超えた概念として、多分に形而上の認識を伴うものである。それと同じく、「芙蓉」は登山の対象の山塊ではなく、時空を絶した景観として捉えるべきである。従つて、帝王の学である日本学の「経綸」は、速い遅い、勝つた負けつた、損した得した、の競輪と席を同じうすべきものでなく、また、世俗の方便から出た施策、術策、対策、方策、政策、弥縫策などと、同日に論ずべきものではない。それらのものとは、おのづから規模がちがひ、それは「一天万乗」の定規を以て寸度すべきものである。そういう「蘇峰学」は、洋の東西の論理を容れないような、神がかり的なものでなく、熊公八公の土俗的思弁をも含めた、図破抜けた際涯に広がりをもつものである。だから、有理数と無理数を併わせ、儒仏道を撰し、神道、キリスト教を包む。それ故、日本学は、これが日本学である、という小じんまり

した纏まり方をしていないのである。いわば、森羅万象神社仏閣を包摂した人間思考といえる。そういうものは、「これがインスタント・ラーメンである」という実体を見せない気がすまない人たちには、まことに飄々然の感をいだかせることであろうが、さりとて、手つとり早く、これが「仁義」であると、「やくざの仁義」をきって見せ、理解を早急にするようなわけにも行かない。

さて、そんなわけで、実体は渾沌だけれど、歴史の底流に潜んで、生々息まない日本学は日本の歴史の随処に、突如として、彗星の如く出現し、いたるところで光を発揮している。その最初の現象は、日本が隋との交通の際に現われた、と蘇峰先生はいわれる（国民読本、日本学の源流の項）。

さて、その時の「日本彗星」の光を辿って見ることにしよう。

大陸では、漢の滅亡後、六朝を経て、隋の文帝の天下統一をみるまでに凡そ三世紀余の歲月が流れた。日本列島ではこの間に、耶馬台国が推古朝になり、厩戸皇子（聖徳太子）がこのとき万機を撰録する任にあたっていた。この三百余年の間にも大陸との交流が続いていたことは史実の通りであるが、日本国が本格の国体をなして、大陸と交通したのは、その推古朝、今から千三百六十五年前の推古十五年（六〇七）七月に小野妹子を遣隋使として派したのが

はじまりといえる。

この記録は、あちらの「隋書倭国伝」に次のように誌されている。

新羅、百濟みな倭をもつて大国となし、珍物多きが為に、ともに之を敬仰し、つねに使を通じ往来す。大業三年その王・多利思比孤、使を遣わして朝貢す。使者曰く「海西の菩薩の天子、仏法を重興すると聞く、故に朝拜を遣わし、兼ねて、沙門數十人を來し、仏法を学ばしめんとす」と。其の国書に曰く「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや、云々」。帝これを覽て悦ばず。

右の記載のある隋書というものは、隋の滅後、初唐の太宗の時に名臣・魏徵らが勅により編集した隋の正史である。

この書には、前掲文のあとに、日本国の国書の作文に気を悪くした煬帝が、外務大臣を呼びつけて、「自今、野蠻人から來た手紙の無礼なものは、朕に見せるな」と、叱りつけた記述がある。

日本の国書の文章は、推古天皇の摂政の聖徳太子によって起草されたものだと思われるが、その文面を見ると、煬帝が不快を感じ、無礼と思うふしが二つある。

その第一は、自分の国を日出づる処といい、相手の国を日没する処と称んだことである。単に東と西を区別するのであれば、東方と西方、東邦と西邦、東国と西国、日出づ

精也新羅百濟皆以倭爲大國多珍物並敬仰之恒通
使往來大業三年其王多利思北孤遣使朝貢使者曰
聞海西菩薩天子重興佛法故遣朝拜兼沙門數十人
來學佛法其國書曰日出處天子致書日没處天子無
恙云云帝覽之不悅謂鴻臚卿曰蠻夷書有無禮者勿
復以聞明年上遣文林郎斐清使於倭國度百濟行至
竹島南望舩羅國經都斯麻國迥在大海中又東至一
支國又至竹斯國又東至秦王國其人同於華夏以爲
夷洲疑不能明也又經十餘國達於海岸自竹斯國以

隋書倭国伝（部分）
清乾隆欽定本より

る国と日入るの国との表現も出来よう。東西を特に言いあらわすことは、使者・小野妹子の口上に、「海の西の菩薩の天子」と相手に敬称を与えている如く、仏教の西方浄土を讚美する意を表わす必要に基づいたものである。ところ

が何故に「没」の字を強いて使ったのであろうか。没（ボツ）は零（ゼロ）に通じ、死を意味して甚だ不吉な字である。煬帝がこれを覽て不快に思うのも無理はない。では、十七条憲法の名文を起草した聖徳太子ともあろう人が、な

ぜこんな字を使用したのか。これは太子の軽卒や迂濶でや
ったことではない。それは、大隋の早晩の没落を予見して
のことであろう。果たせるかな、この時から十年を待たず
して、隋は滅びた。

第二は、恙なきやという句である。恙という字は羊（め
でたい）と心で、不吉な字形ではないが、恙はけだに科に
属する節足動物の幼虫で、これに刺されると壊疽に陥り潰
瘍を起す。それは日本特有の恙虫病の病原体を宿し、こ
れを媒介する虫である。日本では昔から手紙の文に、「恙
御座なく候や」などと書いて、相手の御機嫌を伺う風習が
あるが、そういう日本の習慣を知らない相手の隋国では、
七月の暑さの折に、「虫に刺されて痛くは御座なく候や」
などと書かれたのでは、あたまにくるにきままっている。こ
れは相手国の慣習を知らずにうかつでやったことではな
い。むしろ日本国独自の立場に主体を置き、堂々と自主外
交を展開したものと見るのが至当である。この独立自主の
態度は、日本学の高い見識から出た、当時の日本人の才覚
と見る事が出来る。

それでは、相手の隋の国情はどうであろうかというに、
南北朝時代の末に、楊堅が周の静帝を殺して南北を統一し、
国号を隋とし、自から高祖文帝と称した。文帝は仏教を重
んじ、全国百余州に仏舍利塔を建て、運河の開きくなど
を行い、内治に意を用いた。そして、仁寿宮と称する宮殿

に、さぞ視聴率の高いものであったろう。彼はこの觀光レ
ジャーの間に、万里長城の修造策を行い、北のかた突厥の
侵入に備えた。これらは彼の年号・大業の名をはずかしめ
ない目ざましい国土開発であったが、更に煬帝は在位十二
年の間に、近隣諸国に派兵し、絶えず兵火を交え、最後に
第三回目の高句麗征伐に失敗し、隋は滅亡の運命に追いこ
まれるに至った。

外征による経費の増大は、国民を窮地に追い込み、さら
に大業にことよせた労役の苛酷な徴発は、とめどなきイン
フレ現象を生み、その結果の一切を無辜の蒼氓に委ねて、
煬帝は何食わぬ顔をしていた。彼は、民の力を只の労力と
考え、労働力の再生産などについては、少しも気をまわさ
なかった。この愚帝の無明は、帝王学へのつながりを塞
ぎ、ついに身を滅ぼし、国を亡ぼす結果となった。かくし
て大業の末年になると、四百余州に割拠していた群雄が叛
乱を起した。その状況下で、煬帝は龍舟の中で宴を張りつ
づけ、へ土手の柳は風まかせ：アア、ションガイナ、と
唄っているところを、臣下に刺されたのである。かくして
隋は二代三十八年で滅びた。ここに、唐の白楽天の「隋堤
の柳」と題する詩がある。

隋堤の柳、歳久しく年深くして、尽く衰朽す、風は飄々
として雨は蕭々たり、三株兩株汴河の口、老枝病葉人
を愁殺す、曾て経たり大業年中の春、大業年中煬天子、

を建設して、隋朝の繁栄と安泰を願っていた。やがて、そ
の第二子・楊広は父・文帝を弑し、兄を却けて第二代の帝
位につき、煬帝と称した。

煬帝は GOLD & GOLD の派手好みで、年号を大
業と改めて、全国に亘って大土木工事を起した。東都・洛
陽に、西苑と称する壮大な離宮を築造したのをはじめ、多
くの宮殿楼閣を各地に造った。そして常に四方に巡遊を試
み、そのために馳道（高速道路）を八方に開通させた。こ
の道路の構造は数百歩の中があつて、路端には街路樹が植
えられた。その馳道の中でも、大行山にトンネルを掘っ
て、并州へ通ずる工事は大がかりの難工事であつたとい
うことである。

煬帝の運河は「大運河」と総称されるが、それは、洛陽
の離宮・西苑から洛水を下つて黄河に入り、黄河を下つて
汴水に入り、更に泗水、淮水をつないで、ついに揚子江に
至るものであつた。この馳道と運河は、運輸交通の利便の
目的もあつたが、帝王の巡遊という名のもとに、觀光とレ
ジャーの用に供するのが主目的であつた。たとえば洛陽か
ら江蘇省の江都（揚州）へ巡幸するために、四層の龍舟を
造った。その豪華船の高さは四十五尺、長さは二百尺とい
われた。この舟を挽かせる挽船士と称する八万人の人力に
お揃いのユニフォームを着せ、これを運河の兩岸に配置し
た。この壮観をテレビで放映したら、今のプロ野球のよう

柳を種えて行を成し流水を來む、西は黄河より東は淮
に至る、緑影一千三百里、大業の末年春暮の月、柳色は
烟の如く絮は雪の如し、南のかた江都に幸して佚遊を
恣にせしとき、応に此の柳を將つて龍舟を繋ぎしなるべ
し、紫髯の朗將錦纜を護り、青蛾の御史迷楼に直す、海
内の財力此の時に竭く、舟中の歌笑何れの日にか休ま
ん、上荒み下困しみては勢久しからず、宗社の危きこと
綴旒の如し、煬天子、自ら言う福祚長なえに窮まり無か
らんと、豈知らんや皇子鄒公に封せらるるを、龍舟未だ
彭城の閣を過ぎざるに、義旗己に長安の宮に入る、蕭牆
に禍生じて人事変じ、晏駕して秦中に帰るを得ず、土
墳三尺何れの処にか葬らん、呉公台下悲風多し、二百年
来汴河の路、沙草煙に和す朝に復た暮に、後王何を以て
か前王を鑒みん、請う看よ隋堤亡国の樹を。

これは、中唐の詩人・白楽天が、隋の滅亡後二百年位の
時に詠つたものである。これにくらべて、わが聖徳太子
は、主として朝鮮半島からの情報で、煬帝の容態を診断し
「恙虫に刺されはしませんか」と問いかけ、大隋の没落を
予見していた。刺したのは恙虫でなく、宇文化及という臣
下であつたが、当時、東海の小国の日本が、天下の趨勢を
予見できたのは「日本学」の見識のおかげである。

近頃の日本は女性上位の時代となつたが、この女帝が果

して「女王学」を持ち合わせているかどうか。「恙なきや」の手紙が、どこかの国から来そうである。因みにいう、「蕭牆に禍生ず」とは、内輪げんかが起る、ということである。「後王何を以てか……」の句を反復熟読すべき時代だと思う。

白楽天のこの詩は、唐朝を、二十代二百八十九年の長きに亘って支えつづけた唐人の見識であり、それは初唐より連綿とつながる帝王学に基盤を置く文学である。その帝王学なるものは、唐王朝の成立期にすでに確立されていた。前述の隋書の撰者・魏徵は房玄齡と共に、唐朝創業期における名臣とされる人である。「創業と保守といずれが難きか」という太宗の中間に、房玄齡は「創業」と対え、魏徵は「保守」と答えたそうである。その魏徵の撰文で、歐陽詢の書になる、有名な「九成宮醴泉銘」なるものがある。これは、隋の文帝が造成した仁寿宮を修復し、唐の太宗がそこに避暑に行った時に、醴泉が湧いて出たという奇蹟を、勅により魏徵が撰文したものである。

その文の冒頭に、隋の仁寿宮の壮大豪華を描写したところがある。それを摘記すれば、「此れ則わち隋の仁寿宮なり。山に冠して殿を抗くし、壑を絶ちて池と為し、水に跨りて楹を架し、巖を分ちて闕を竦て、高閣周り建ち、長廊四に起り、棟宇膠葛し、台榭參差たり。仰き視れば則わち遺蓮百尋、下に臨めば則わち崢嶸千仞。珠壁交映じ、

金碧相輝き、雲霞を照灼し、日月を蔽虧せり。其の山を移し、澗を廻らし、泰を窮め、侈を極め、人を以て欲を従にするを觀れば、良に深く尤に足れり」とある。

そして、魏徵は銘の結語に、隋の奢を極めた宮殿に居をおく、大唐二代の皇帝・太宗の心掛けとして、次の如き文章を記している。曰く、「人は其の華を玩ぶも、我は其の実を取る。淳に還り、本に反り、文に代うるに質を以てす。高きに居りては墜ことを思い、満を持しては溢れんことを戒しむ。茲を念いて茲に在れば、永く貞吉を保たん」と。

この魏徵の文も、前掲白楽天の詩も、共に後王の立場から前王をかながみた帝王の立場のものである。帝王学というものは、流転を觀測し、生々を予見する天衣無縫の思索である。蘇峰学とはそういうもので、これが日本学といわれるものである。これは宮中や君側だけに存在するものではない。ボツ(没)にされるような帝王には無縁のものである。熊公八公の俗話には深いつながりをもつものである。

オイ大将、オイ親方という呼び方をしなくなった今日では、日本学は、オイ社長、オイ課長と呼ばれる「長」のつく人士に必要なものである。それは、「これを思いてここに在れば、永く貞吉を保たん」という値打ちのものであり、「士」と自任する者の志さすものである。



二行末

當年功罪事已齊閑話猶有
淚端衣遺隋書在豈無日
出自東長向西

癸丑陽春

雲外山人新撰日本學題辭



当年の功罪こと己に齊しく、閑話なお有りて涙は衣に満つ、
遺隋の書あり豈疑誤あらんや、日は東より出でて長に西に向う。
癸丑陽春、雲外山人新撰日本学の題辭として 蘭成

か
の
昔

日本橋店 / 三越本店正面 / 241-7471~2
 水道橋店 / 地下鉄・国電 / 812-6268~9
 王川店 / 水道橋駅前 / 709-2199直通
 王川店 / 玉川高島屋内 / 709-2199直通